The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

第59回学術大会パネル発表報告

法華経解釈学の諸視点

代表　久保継成

本パネルは『法華経』とその成立，伝播の過程で人びとに与えた影響をそれぞれの角度から探求し，『法華経』文化の全体像と内包する多角性を浮き彫りにするひとつの試みである．

1．『法華経』の形成に関する一視点：松本史朗（駒澤大学教授）

『法華経』の段階的形成に関しては，従来より諸説がなされてきたが，「方便品」の散文部分を最古層とする説を新たに提起し，『法華経』の本来の立場について考察する．

梵本による限り，「方便品」散文部分は一乗＝仏乗を説くが，菩薩や大乗という語を全く使用していない．これが『法華経』最古層の根本的立場だと思われるが，「譬喩品」ではこの両者が使用され，「舎利弗という声聞も，実は過去世から菩薩行を行じてきた菩薩である」という理解から舎利弗に授記がなされる．これは“菩薩だけが成仏できる”という差別的な大乗の考え方であり，「方便品」の一乗＝仏乗の立場から変化したものである．「方便品」韻文部分にも，この「譬喩品」の考え方等が認められるから「譬喩品」散文部分以後の成立と思われる．

Q：私は法華経は先行の華厳経などの経典スタイルを真似て長行と偈が一緒に書かれたと思ってるのですが．A：成立史の問題というより，私は方便品長行と譬喩品の長行部分の思想的な隔たりを問題にしています．

2．法華経聴聞者を再考する：池上要靖（身延山大学教授）

仏陀の教説を聴聞する対告衆に関する用語の中で，kulaputra（族姓子，善男子）は菩薩と同義であるという見解が一般的である．しかし，法華経に関して言えば，あまりにも漠然としている．パーリ聖典や初期大乗のサンスクリット文献から，その用例の抽出を試みた結果，パーリ文献からは信仰を持つ在家者が出家したときにこの語が用いられている例が大多数であること，初期大乗の文献では，古層に属する文献では三乗全般に使用されていたが，成立がやや遅れてきた文献からは特に菩薩乗に対して用いられるようになっていること，そして法華経では法華経の聴聞者がすべてkulaputraと表現される菩薩であることなどが明らかになった．爾前経の主張（三乗の中の菩薩乗＝kulaputra）を踏まえつつ，法華経は独自にkulaputraを開陳して，法華経を弘経する一切衆生の意味で再構築した，と見なされる．

Q：信仰心を持つという事が善男子・善女人ということの前提となっていると思

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

うが，その点について詳説して頂きたい．
A：法華経の一偈・一句を聞いて発心して随喜するということが大前提になっていると思う．

3．『法華経』における“さとり”：久保継成（在家仏教こころの研究所代表）

『法華経』は，“さとり”を示す涅槃，般涅槃をとりあげながら，これを否定している．一方，anuttarā samyak-saṃbodhi 阿耨多羅三藐三菩提（偈ではその省略形としての bodhi,agra-bodhi）は，菩薩が修行を通して生み出すものであり，仏のみの境地ではない．仏はこれを abhisaṃ√budh した存在と位置づけられる．釈尊は anuttarā samyak-saṃbodhi を abhisaṃ√budh していても，般涅槃することなくこの世で働く．しかも，般涅槃した多宝仏も釈尊と並座して『法華経』を説く場に釈尊と共に現存するという．菩薩の生み出すさとりの境地は仏と共有する精神的領域であり，その活動は仏世界の荘厳をおりなす．
Q：法華経のさとりは，対象化された観念ではなく，常に現在働いているものだとということではないか．

4．法華経に対する編集史的視点：津田眞一（国際仏教学大学院大学教授）

われわれの『法華経』研究が自ら解釈学と称し得るとしたなら，その条件は，まずテキスト論的自覚，次いでその解釈の現実において仮設を用意し得ていることである．私は『法華経』ことに「方便品」を一種のエニグマ（暗号体系）であると考える．それはこちらが用意する解読コードに応じた真理を呈示する．その解読コードが，今の場合〈「方便品」三世代関与説〉という編集史的仮設である．これは「方便品」成立に第一・第二・第三A・第三Bの三世代の関与を想定するものであり，この仮設は改めてわれわれに「小善成仏」の教義を『法華経』の救済論の尖端として開示する．
Q：すべて悟りの道を歩むものであると言う意味で，英語では ALWAYS であり同時に ALREADY で，要するに永劫回帰の中で存在と生成がクラッシュしたところが，法華経のさとりの中にはあるのではないか？ A：その通りだと思う．WERDEN と SEIN との弁証法だと思う．

5．日本中世文学と法華経：関口忠男（大東文化大学名誉教授）

『法華経』が日本文学にいかに受容されたかという問題解明の一環として，今回は，日本中世文学の中でも特に勅撰和歌集における『法華経』受容の実態について考察する．勅撰和歌集は，『古今和歌集』以下，21の歌集が撰進された．そのうち，中世期（鎌倉・室町時代）には，『新古今和歌集』以下，14の歌集が撰進されている．これらの勅撰和歌集の中に，仏教関係の歌のみを集めた「釈教歌」が部立として成立し，ここに仏教歌が多彩に展開する．この釈教歌の中で，『法華経』関係の歌が約3割を占め，その中で『妙法蓮華経』28品各品については，

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

前半の章に集中している．なお，この点後半の流通分に関わるものは説話集に多い．
Q：法華経に対して浄土教に関する歌が少ないのは何故か？
A：法華経に関しては平安期からの特別な受容の伝統があったからではないか．

6．『法華経』流通分における守護神信仰と現世利益について：関戸堯海（立正大学日蓮教学研究所研究員）

『法華経』流通分は補足的な位置づけをされてきた．しかし，守護を誓う菩薩・善神は，多くの庶民に信仰されていくようになる．『法華経』は思想的・文学的にすぐれるダイナミックな経典である．思想的には「二乗作仏（開会思想）・久遠実成」や，「菩薩道の思想」「授記思想」などに着目されてきた．そして，霊山会・虚空会や地涌の菩薩の出現などの「ダイナミックな場面展開」や，釈教歌に詠み込まれた「法華七喩の文学性」など，その魅力は尽きない．薬王品以降に説かれる菩薩・善神の守護が，日本人に信仰されて来た事例を見ると，品川海晏寺の観音像，雑司ヶ谷鬼子母神堂や富山妙伝寺の鬼子母神十羅刹女像など数多く，庶民の信仰の対象としての流通分の重要性が浮かび上がる．
Q：私も『法華経』の流通分の不思議な現世利益の力を実感している．

文学をとりこむ仏教・仏教に解消する文学

代表　松村　恒

1．問題提起

仏教の文学に与えた影響や意義に関しては，今更論ずるまでもないことであろう．しかし仏教の教理内容に踏み込むことは，仏教外の方面からは抹香臭い印象を持たれるためか，やや敬遠されるきらいがないこともなかった．仏教と文学の間にそうした溝があれば，それは埋められるべきものである．ただ両分野共に大きな領域の広がりを持つので，出発点として仮りに視点を限ることが必要である．文学の方でも日本古典文学の場合には「仏教文学」という分野が既に確立しており，また長い研究の歴史もあるので，これはひとまず考慮の外に置く．すると近代日本の仏教受容という視点がひとつの選択の候補になる．仏教の長い伝統と歴史のある日本において，近代の知性があらたに仏教と向きあう点は注目に値する．日本の近代知性には西洋知性が対応するが，その両方を一身に兼ね備えたラフカディオ・ハーンはリンクの事情を観察するのに格好の対象となる．対象の範囲を広げるためにW.B.イェイツをも射程に置いた．日本にも関心を寄せ，能・謡曲に関わる作品も生み出しているので，ハーンに準ずるリンクの使命を十分に果たした文人と言える．当学会では仏教寄りの発言に忌憚なく進むことができるので，この問題にとりかかるためには最適の場であった．

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

2．各発表要旨

フロアーとの応答をも含め，参加者の自由発言の場を十分に確保するために各パネラーの基調発表には，できるだけ時間を抑えてもらった．その替わりにやや詳しいハンドアウトを配布した．プログラムの順を若干変更したので，その順に以下に記録しておく．

2.1. 総説

1節で述べたことと，パネル全体を進めるにあたっての作業仮説を呈示した．これについては，今西順吉「明治知識人と仏教—夏目漱石をめぐって—」『論集日本仏教史』8（東京：雄山閣，1987），269-288から多々学ぶことがあり，そこの重要な点として，夏目漱石が伝統的な日本仏教を受け入れていた（つまり信仰者の立場として仏教に接していた）が，もう一方で同時に生きた観念として働いていたという二重性の指摘がある．以下のトークにはいずれもこの問題が関わっている．

2.2. 木内英実（小田原女子短期大学准教授）「中勘助に共鳴された仏教・インド思想」

中勘助には『提婆達多』といった明らかに仏教的作品というものがあり，作者の心理的な面を反映したものという批評も出されている．しかし仏教や印度思想の影響を組織的に探る必要が残っている．また影響関係を具体的に指摘するという地味な作業も残されていた．木内は勘助の書簡や旧蔵書の状態を精査し，影響下にある作品のリストを『銀の匙』『提婆達多』『犬』『菩提樹の蔭』『鳥の物語』随筆「古国の詩」「古都のかをり」などへと拡張した．作品の中での具体的な影響下にある章節を指摘するとともに，和辻哲郎・宇井伯寿らとの交わりを通じて専門的な知識も獲得していたことが確認された．注目すべきは，ハーンの書を蔵していたばかりでなく，そこから新たに作品を生み出していった事例が紹介され，ハーンのパネラーへとつないでいった．

2.3. 松村有美（明治大学ことわざ学研究所）「ラフカディオ・ハーンの再生物語の再話」

ハーンは来日以前から仏教についての学習を進めていた．英語フランス語の書によることが多かったので，近代以降西洋の学者の研究成果を吸収していたのである．ところが来日後日本の習俗ともなった仏教的なものにみずから接することにより，彼は二様の仏教を持つことになる．この両者の折り合いをつけてゆくことがハーンの日本での大きな課題の一つを形成し，仏教的再話作品・仏教を主題とした論文の執筆により，それを果たしていった．ハーンの内部のふたつの仏教は2.1節で述べられた二重性と並行的である．おりあいをどのようにつけていったかが，ハーンの仏教観を正しくとらえるための重要な要素になる．このトークでは三つの再生物語が例として出された．「勝五郎再生記」「お貞の話」「力ばか」であるが，順に〈前世を知っていた〉〈一時的に記憶が蘇った〉〈本人は前世を知らないが再生者である印を伴っている〉という三つの段階を反映して層をなして

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

いることが分析された．ハーンの論文「涅槃」中の，理論的には本来の仏教（原始仏教？）では輪廻転生を認めないが，民間信仰と結びついた様々な仏教的なものがあるというパッセージと関連づけられた．

2.4. 伊藤宏見（東洋大学名誉教授）**「イェイツに見られるケルトと東洋の輪廻思想：アイルランド・日本・インドとの習合：W・B・イェイツの詩」**

詩人イェイツには広く東洋文化の影響がみられ，謡曲・俳句・鈴木大拙・日本美術等を通じて日本にも相当の関わりがある．この場で全般的に論ずるのは不可能であるが，一面を垣間見れば，『クール湖上の白鳥』の白鳥のイメージがカビールの詩の影響下にある．墓碑銘「冷厳なるまなざしを，生と死に投げかけて，羇旅の人よ，行け」も同様であるが，この点に対してハーンは out of the sea of Death and Birth といい，生死の海を離れて，自性真如の世界を目指しているとする．こうした影響下にはブレイク・エリオットも連なり，霊魂の浄化と魂の安寧を求める性向のあかしであった．

2.5. 松村恒（大妻女子大学教授）**「仏教に昇華された左翼思想―秋田雨雀の例―」**

秋田雨雀は終生プロレタリア文学のジャンルに属する文人であるが，仏教的な活動が若干顔をのぞかせる．「仏陀と幼児の死」が仏教説話の再話であるが（『ダンマパダ註』にもある，死人を出したことのない家から芥子粒をもらってくる物語．直接の材源は未確認），執筆動機は4歳の娘を病気で失った悲しみを克服するためであった．イデオロギーを超えた仏教の効用の実例である．

3．質疑応答とまとめ

フロアーからの質問にも輪廻転生を仏教的と言ってよいかという疑問が提出された．西洋文学・キリスト教の側から，否定ではない宗教の枠を超えてゆく詩作例が例示された．こうした複数の分野にまたがる考察の有用性と困難さが認識された．具体的には，例えばハーン「涅槃」には仏書からの引用がたくさんあるが，これらの出所を同定した徹底的な注解が必要である．単に英文を日本文に訳しただけでは，真の理解は得られない．英文学者と仏教学者のコラボレーションによってしか，この困難は克服できないかもしれないという提言でパネルは結ばれた．

五姓各別は本当に差別思想か ――インド～中国～朝鮮～日本の視点から――

代表　佐久間秀範

はじめに：五姓各別は成仏しない衆生を説く思想との偏見を見直すきっかけとして，このパネルを企画した．

1．玄奘と五姓各別思想

吉村　誠（駒澤大学准教授）

玄奘が六四九年に翻訳した『仏地経論』には，有情には声聞種性・独覚種性・菩薩種性・不定種性・無性有情の五つがあり，このうち無性有情は決して成仏で

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

きないと説かれていた．また，悉有仏性や一乗の教えは「真如法身仏性」について，または「少分の一切」に向けて説かれた方便であるとも説かれていた．玄奘門下の唯識学派では，これに基づいて理行二仏性説や一分一切説を主張した．しかし，一切皆成論者は五姓各別を認めず，これを批判した．玄奘は六五九年に『成唯識論』を翻訳したが，そこには本有無漏種子の有無によって五姓各別があると説かれていた．唯識学派ではこれを根拠として五姓各別説を確立し，一切皆成論者の批判に対抗した．玄奘の翻訳のうち『仏地経論』と『成唯識論』だけが糅訳であり，その原文に五姓各別が説かれていたという証拠はない．五姓各別は玄奘自身の思想であり，その理論は唯識学派で段階的に成立したといえる．

2．東アジア仏教における五姓各別観の諸相　　**橋川　智昭**（東洋大学講師）

五姓各別思想では，“一乗の教説は不定種姓という一部分の衆生に説かれたものであり，成仏（大乗）に与らない定性の声聞・縁覚や無種姓人の存在を隠しているために密意・方便の教えである”，それ故，“一乗の対極にある三乗差別・五姓各別に帰着する”と捉えられている，と説明される．これは一性皆成仏思想における対立者の紹介であり，客観的事実というより，むしろ皆成仏の教学が構築される中にその意義を求めるべきである．しかし当の唯識思想からすれば，種々の一乗経典は第三時了義教に相当し，五姓各別とも違背しない．一乗の教えを通じて，不定種姓ならば小乗から大乗への転向を可能とし，仮に定性声聞であろうと，その身分のままに一乗教に浴し，大乗的自覚（例えば不愚法）への転換を要請する．唯識教学は，そうした遺漏なき役割を有する一乗を真実一乗として根本に据えており，単純な多様（峻別）志向論のごとく整理づけできるものではない．

3．五姓各別思想の日本的展開―中世法相宗・良遍の思想を中心に―

蓑輪　顕量（愛知学院大学教授）

五姓各別を前提に受容した日本の法相宗も，その思想を如何に位置づけるかが大きなテーマとなった．基の教学を正統とした法相宗は，三論・華厳・天台との間で常に「一切皆成」に関し議論となった．院政期から登場する四箇大寺（延暦寺，園城寺，興福寺，東大寺）の教学で勢力が強かったのは天台と法相であり，論義の中で五姓各別が教理的な問題として議論された．ただし，格式の高い法会における論義では会通が目的とされており，信仰として貫かれたかどうかは疑わしい．鎌倉初期に禅宗が紹介されると，五姓各別思想は禅の述べる「頓悟」「皆成」説と対峙しなければならなかった．良遍はこのような状況下，理論上は全てが成仏するが，実際上は成仏しない者もあると主張したが（理行二仏性説に基づく），思想上は「皆成」説に与したと位置づけられる．それは五姓各別思想を教理的な議論ではなく，仏法実践の問題として捉え直したことを意味すると考えられる．

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

4．中国思想史の文脈と五姓各別 **馬淵　昌也**（学習院大学教授）

中国では戦国期に人間の本性や，個人・万物と究極の実在・本質との関係が論じられた．漢代には帝王と宇宙の関係に関心が集中し，個人は後退した．その後魏晋時代には再び個人・万物と究極の実在·本質との関係が問題になる．この時期に仏教は成仏を目ざす教えとして受容された．特に『涅槃経』の「悉有仏性」説は,「悉皆成仏」説とみなされ,自ら成仏して社会救済を目指す人材を誘引した．その中で「今生成仏」を期する人々が出現し，自ら仏だという人も出た．玄奘の五姓各別説は，こうした風潮を牽制し，成仏は万人に保証されていないことを提示して，修行者の自省を促し，実直な修行に精励させんとしたのであろう．ただし，五姓各別は仏教の汎用性を狭めるものとして，批判されざるを得なかった．宋以降の儒教では万人に聖人性を認めて汎用性を保証したが，思想の普遍的有効性という視点からすると，五姓各別思想が中国で長期にわたって覇権を維持するのは難しかっただろう．

5．インドにおける五姓各別思想の源流 **佐久間秀範**（筑波大学教授）

玄奘以降,東アジアでは五姓各別思想が論争のテーマとして注目されてきたが,インド，チベットさらに東南アジアに至る仏教でこのテーマが採り上げられた形跡はほとんどない.『瑜伽論』には三乗思想と並列して無種姓が述べられているが,五姓がシステム化されたわけでなく極めて日常的実践的である．『楞伽経』には五姓が揃っているが，最終的に成仏できない無種姓は説かれていない．『大乗荘厳経論』では偈文，世親釈，無性釈，安慧釈の順に次第に五姓各別のラインが整ってゆく過程を見ることが出来る．ここでの無種姓は，今生では成仏できないが時期を得て成仏するものと，全く救済の余地のないものとに分かれている．玄奘は『仏地経論』の翻訳において後者だけを第五種姓として独立させた．これは玄奘が如来蔵思想に偏向した学僧達に無種姓の存在を強調し，出家者の修行の心構えを示す目的だったのではないかと考えられる．

まとめ

世間の無責任な流言に対して，五姓各別を学問的に見直すことで，瑜伽行派の実践的色彩が浮き彫りとなり，この思想が，中国で如来蔵思想に偏向された修行実践軽視への玄奘の警鐘を示す可能性があるとの研究の方向性が得られた．

現代人の「いのち」と仏教

代表　木村文輝

日本印度学仏教学会が，1988年に臓器移植問題検討委員会を設置してから20年が経過した．その間に，我が国ではいわゆる「臓器移植法」が成立し，それに

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

もとづく脳死移植が実施されたばかりでなく，一方では「いのち」の誕生に関わるクローンやES細胞，代理母等の問題が，他方では「いのち」の終焉に関わる介護と看取り，安楽死等の問題が次々に提起された．

こうした「いのち」の問題に対して，仏教研究者からのアプローチは，臓器移植問題の時ほど盛り上がっていないのが実情である．けれども，その必要性が失われたわけでは決してない．むしろ，これからも「いのち」の問題に対する仏教的考察は，ますます求められていくであろう．ただし，その手法が20年前と同じでよいとは思われない．現在は，当時の反省を踏まえながら，仏教的考察の新しい方向性を模索すべき時期に来ているのではなかろうか．例えば，特定の宗派的見解に偏ることや，経典や論書の細かい字句の解釈に拘泥すること，あるいは，臓器移植や安楽死という個々の問題の是非の判定に終始することは控えるべきであろう．

このような視点にもとづいて，本パネルでは人間の「いのち」の問題に関して，他者との関係性に注目しつつ，仏教の立場から総合的に論ずるための基本的立脚点を構築することを目的とした．

パネル発表においては，以下の4人の発表とコメンテーターの総評の後，参加者との間で議論が交わされた．

木村文輝（愛知学院大学准教授）は「リビング・ウィルの射程—自己決定権の「自己」とは誰か—」と題して本パネルの趣旨説明を行うとともに，「いのち」の問題を個人の問題に矮小化すべきでないことを論じた．人間は誰もが周囲の人々との相互依存関係，いわば縁起の関係網の中で生きており，一人の「いのち」は周囲の人々に多大な影響をもたらす．それ故，私達は周囲の人々の意向を無視して，自らの「いのち」に独断的な決定を行うべきではない．「自己決定権」という際の「自己」は，当事者とともに，その周囲の人々をも含む広い概念でなければならないことが論じられた．

鍋島直樹氏（龍谷大学教授）は「縁起思想の生命倫理学」と題して発表し，仏教的な生命倫理は縁起思想にもとづいて構築されるべきであり，それは「あらゆるものとの縁に目覚め，そのいのちの絆をあたため，自己と世界の安穏のために努力するという倫理である」と定義づけた．同時にそれは，すべての存在が等しく重要であるという智慧を生み，そこから，一方ではあらゆるものへの分け隔てのない慈悲の精神を，他方ではあらゆるものへの感謝と，人間の力には限界があることを忘れてはならないという謙虚さをもたらすことになると論じられた．

前川健一氏（東洋哲学研究所研究員）は「デザイナーベイビーは王舎城の夢を見るか—生殖をめぐる倫理と仏教—」と題して，「子供が欲しい」という欲望そのものを批判的に見つめる仏教の立場を指摘した．仏教では生殖に対して宗教的意義を認めておらず，子供を「無垢な存在」とみなしていない．むしろ，「子供が欲しい」と願うことは子供を「もの」として扱うことであり，その延長上には「望ましい子供が欲しい」という欲望が生じてくる．このような視座をもつ仏教であ

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

ればこそ,「なぜ子供が欲しいのか」を根底から問い直し，現実の諸問題に対する新たな観点からの議論を可能にするであろうことが論じられた.

谷山洋三氏（四天王寺大学准教授）は「スピリチュアルケアの臨床から見えてくる諸問題」について論じた．まず，スピリチュアルケアは患者等の世界観が基準となるのに対して，宗教的ケアは宗教家等の支援者の世界観が基準となるものであり，両者を混同することの危険性が指摘された．その上で，スピリチュアルケアに関わる仏教者は，自らの信仰や価値観を相対化し，相談者の苦悩に寄り添う覚悟を定めるとともに，例えば,「いのち」は一切衆生に共有されているというような,何らかの超越的視点を自己の内面に保持することが必要であると語られた.

以上4人の発表の後に，**大野栄人**氏（愛知学院大学副学長）が「各発表者に対するコメント」として，それぞれの発表内容を総括し，生者の救済が現代における仏教の急務であることを指摘した．また,「いのち」の問題をめぐるパネル発表が,今後も日本印度学仏教学会の学術大会で継続的に実施されることを切望された.

その後の参加者を交えた議論では，4氏から下記の質問が出された．斎藤明氏（東京大学大学院教授）は,「縁起」を相互関係の意味で理解する際の教義上の問題と，臓器提供における本人の意志確認の必要性について質問された．井上ウィマラ氏（高野山大学准教授）は，仏教の立場から「いのち」を語る際には無明と苦,あるいは四無量心の概念を重視すべきことをはじめ，多くの点を指摘された．紅楳英顕氏（相愛大学教授）は，終末期患者に対する宗教的ケアの可能性について質問された．中島小乃美氏（奈良県立医科大学講師）は，移植医療に対する仏教的立場からの関わり方と，死生観を養う方法について発表者の見解を質問された.

いずれの問題に対しても活発な議論がなされ，予定時間を若干超過しながら,本パネルは盛況のうちに終了した．なお，本パネルの詳細な報告は，愛知学院大学の『禅研究所紀要』37号（2009）に掲載予定である.

環境問題と印度学仏教学の接点

代表　原　実

我々は過去三年に亘り日本学術振興会より研究助成金の交付を受け，夕食会を交えて共同研究者の一人一人に研究発表を義務づけて定期的に研究討論会を開催している．そのメンバーの一人である木村清孝前本会理事長の勧めにより，今回本学会においてパネルを組む運びとなった．かくて大会2日目の9月5日午後2時半より同4時半まで愛知学院大学14号館14206教室において「仏教環境論と現代」と題して下記の要領の下にパネル発表会を持った.

1	印度学仏教学と環境論の接点	原　実	((財) 東洋文庫研究員)
2	アーユルヴェーダにおける環境	北田　信	((財) 東方研究会研究員)
3	修行の場としての森林と環境	松村淳子	(国際仏教学大学院大学教授)
4	身土不二—食環境を考える	岡田真美子	(兵庫県立大学教授)

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

5　草木成仏　末木文美士（東京大学教授）
6　上記諸氏の発表に対するコメント　川崎信定　（(財）東洋文庫研究員）

1の総論と6の総括を除いて，発表者には夫々20分の論文発表と5分の質疑応答の時間が与えられていたが，論文発表後に桂紹隆，荒牧典俊，矢野道雄，丸井浩の諸氏は，我々の看過していた問題点について極めて有益な指摘を賜った．最後の川崎信定の総括が極めて有効であったので以下にそれに基づいて全体を伺うよすがとする．

研究代表者は先ず環境問題という現代的課題と，我々の学問とが如何様に関連するかという問題意識から，古代インドの「不殺生」(*ahiṃsā*) の概念と東アジア仏教の「山川草木悉有仏性」の思想を取り上げた．前者は人間と動物，後者は人間と植物の関わりを扱う故である．

北田信はインドの伝統的医学であるアーユルヴェーダの流体エネルギー理論(*tri-doṣa*)を取り上げて，人体と環境との相互影響を論じた．同氏はアーユルヴェーダの学問体系それ自体が環境論に他ならず，人間は環境状態を端的に具現した「環境の鏡」である事を指摘した．更に「サートミヤ（許容できる度合い)」の概念を中心に，医食同源，新陳代謝，更には人間による不正や環境破壊と，それへの対処浄化法を論じた．

松村淳子は20世紀後半に到るまでタイの奥地の森林地帯で実践されていた頭陀行僧についてのKamalaTiyavanichの研究の一端を紹介して，森林遊行僧の伝統と環境の関わりについてコメントした．又参考資料としてJātaka，Nidānakathāに見られる森林修行に関する一節を示し，古代の森林修行の有様がTiyavanichの紹介する修行僧の生活と理想と本質的に変わるところがない事を示した．

岡田真美子は身体と環境がこうでありながら異なるものでないとして食養生を説いた我が国の「身土不二」運動の始まりと展開を紹介し，仏教と環境活動の関わりについて考察した．この術語は中国，唐の湛然（711-782）が初めて用いたものであったが，それが鎌倉仏教に取り入れられ，更にその理論が現在韓国や北米にも波及した地産地消運動にまで発展した．

末木文美士は以前その著「平安初期仏教思想の研究」（東京1995）において安然の「勘定草木成仏私記」を翻刻して訳注を加え，それをもとにして日本の草木成仏説の特徴を論じた事があったが，今回それを再検討しつつ中国禅における「無情成仏，無情説法」とその日本における発展（空海，道元，親鸞）を論じづつ，日本古来のアニミズムに言及した．

川崎信定は上記5名の発表者の論点を總括しつつ，自らの研究，即ちチベット語訳に保存される6世紀のインド大乗仏教中観派論師バーヴィヴェーカ（清弁）の「思択炎」(Tarka-jvāla) に見られる生物観を論じた．

最後に今回のパネル発表会に，終始献身的に尽力された東大大学院の金子奈央さんに深甚なる謝意を表する．

NII-Electronic Library Service